

研究課題（テーマ）		本看護学部卒業生を対象としたユマニチュード®継続教育プログラムの構築と評価		
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	看護学部看護学科	准教授	青柳 寿弥	
分担者	看護学部看護学科	教授	林 静子	
	看護学部看護学科	講師	濱野 初恵	
	看護学部看護学科	助教	大松 尚登	
	看護学部看護学科	助教	米山 真理	
	看護学部看護学科	教授	岡本 恵里	
研究結果の概要				
【背景・目的】昨年度実施した、総合病院に新人看護師として勤務する本学部卒業生のインタビュー調査において、せん妄のある患者対応の困難感、身体拘束をせざるを得ない状況や、業務上の時間制約から患者の同意を待たずにケアする場面での葛藤があることが明らかになった。不確実性や複雑性が溢れる臨床現場において、経験の浅い看護師が人権を尊重した共感的な関わりを多様な場面で継続して実践することの難しさがあることから、看護継続教育の必要性が示唆された。 そこで本研究の目的は、共感性を高めることに主眼をおいたユマニチュード®の継続教育プログラムに基づく研修を実施し、受講者への教育効果と教育課題を検討することとした。 【方法】本学部を卒業した2年目看護師15名を対象に、2025年3月10日に研究者らで開発した研修プログラムを実施した。プログラム内容は、午前にユマニチュードに関する講義（1.5時間）、午後にMR機器のAvatarおよび対人によるユマニチュード技術演習（各0.5時間）、臨床でのケア体験を共有するグループワーク（0.5時間）で構成した。データ収集は、日頃のケアに関する自己評価（研修直前）、研修の評価や感想（研修直後）、感情労働尺度および職業的アイデンティティ尺度（研修前後および研修2週間後）をWeb（定量調査）で実施した。加えて、研修直後に、①研修参加の動機、②研修を通じた学びや気づき、③今後に向けた自己課題、④要望についてグループインタビュー（5名ずつ）を実施した（定性調査）。定量的データの分析は単純統計および統計学的分析、定性的データの分析は逐語録を作成して質的帰納的分析を行っている。富山県立大学「人を対象とする研究」倫理審査部会の承認を得て実施した（看護第R6-25号）。 【結果】日頃のケアに関する自己評価では、「できている」と「まあまあできている」と回答したケア技術の割合は『見る』は93%、『話す』は72%、『触れる』は73%であったが、『立つ』技術の割合は、「あまりできていない」は60%、「やりたいのにできていない」は33%と実施率が低かった。研修を通して学んだことに関する研修後のインタビュー調査では、【ユマニチュードは困った時に行う技法ではなく予防的に行うことが重要】や、【普段の患者とのやり取りで待つ時間を取っていなかった】等の気づきが挙げられた。研修後の評価や感想に関するWeb調査では、講義や演習での学びに関する日頃のケア実践への影響について「役に立つと思う」は100%であり、研修全体の満足度に関する回答は「満足」が93%であった。				
今後の展開				
今後は、収集した定量的および定性的データの分析をすすめ、開発したユマニチュード継続教育プログラムの教育的効果と教育課題について詳細な検討をしていく。またその知見について、学会発表および学術論文として公表していく。				